

電気は生き物か？

ジャйна教出家修行者と電化製品

堀田和義

仏教徒が守るべき最も基本的なものとして、不殺生、不偷盗、不淫、不妄語、不飲酒という五戒がある。この五戒は、仏教と時代、地域をほぼ同じくして誕生し、マハーヴィーラを開祖とするジャйна教の五誓戒とよく似ている。ジャйна教も仏教などと同様、苦しみに満ちた輪廻転生からの解脱を目的とし、仏教では放棄された苦行も含む禁欲的な実践を説いている。ジャйна教では五番目を不飲酒ではなく無執着とするが、ジャйна教でも飲酒が禁じられ、仏教でも執着が禁じられているの言うまでもない。

これら五つの最初に掲げられる不殺生は、仏教やジャйна教だけでなくヒンドゥー教でも重視されるが、ジャйна教の徹底ぶりは特に有名である。すべてのジャйна教徒が菜食主義を徹底しており、出家修行者は宗派によっては虫などを吸い込まないように常時マスクを着用し、地面の小さな虫などを踏まないように箒を携帯している。他にも、生き物を殺生

する可能性のある自動車や飛行機、船などといった乗り物に乘らないなど、生活の様々な面において細心の注意を払っている。在家信者もまた、商業、金融業のほか、最近ではIT関係などといった、なるべく殺生の機会の少ない職業に就くことが求められる。

ジャйна教では顕微鏡などが発明されるよりもずっと前から、目に見えない微細な生命体の存在を想定しており、その歴史はジャйна教そのものの歴史とほぼ同じ長さを持っている。また、ジャйна教には地・水・火・風といった元素の中に生命体が含まれているという考え方があり、これに関しては、元素も含む自然界のあらゆる物に生命が宿っているというアニミズム的、物活論的な解釈と、物質としての元素の中に生命体が閉じ込められているとする解釈とがある。

どちらの解釈が正しいのか、また、現代のジャйна教徒がどちらの解釈をとっているのかを判断するのは難しいが、出

家修行者はそれらの生命体を損なわないよう、地面を掘ったり、水を撒いたり、火や風を起こしたりすることを禁じられており、在家信者であっても、むやみにそういったことをしてはならないとされる。

このことに関連して、かつて興味深い出来事があった。話は今から十年ほど前に遡る。パキスタンと国境を接するインド北西部ラージャスタン州のラードウヌーンを訪れた時のことである。ジャイナ教には、大まかに言つて、白衣派（白衣を着る者たち）と空衣派（空間を衣とする、すなわち裸形の者たち）という二大宗派があり、両派ともさらに偶像崇拜を認める立場と認めない立場とがある。

ラードウヌーンには白衣派の偶像崇拜を認めない一派である。テラーパンタ派によつて設立されたジャイン・ヴィシユヴァ・バーラティー大学があり、私はこの大学のゲストハウスに三ヶ月半ほど滞在していた。毎日、午前中はカルカッタ大学から来ていた先生にテキストを読んでもらったり、図書館で資料を収集するなどして過ごし、午後はキャンパス内にある僧院で過ごしていた。

テラーパンタ派の出家修行者は小さなグループを作り、雨期の四ヶ月間以外はインド全国を徒歩で遊行しているが、病気や老齢などにより遊行することのできなくなった者たちのために、若い出家修行者たちが一年交代で介護をする施設が設けられている。キャンパス内にある僧院もそういった施

設のひとつであった。

僧院では、日が沈む頃になると「アルハット・ヴァンダナ」と呼ばれる礼拝が行われる（早朝にも行われるが、そちらは参加する人が少ない）。日が沈むとキャンパス内は真つ暗になり、僧院でも電灯がつけられる。通い始めて数日経つた頃、電灯のスイッチを入れるのが必ず在家信者であることに気付いた。最初は「お坊さんにやらせてはいけないので、在家信者が進んでやっているのだろう」と思っていたが、その後、スイッチを入れたいのだけれども自分で入れるわけにはいかず在家信者が来るのを待つているように見える場面にも遭遇し、何か理由があるのかもしれないと考えるようになった。

そしてこのほんやりとした考えが確信に変わるような出来事があった。テラーパンタ派の人たちは出家修行者も在家信者もよく歌を歌う。礼拝の後などに、突然ある人が歌い出すとみんなもそれに合わせて歌つたりするのである。歌をテープレコーダーに録音することもあった。そのような時もの音を聞かせてくれるようなこともあった。そのような時も出家修行者は在家信者にテープレコーダーを持ってこさせて、操作するよう指示していた。ある時、操作方法が分からないでまごついていてる人がいると、少しイラツとした出家修行者がそれを手に取つて自分で操作し、その直後に「あつ、しまった!!」といった顔をして、慌ててそれを放り投げたのである。この時、私は「これは何か特別な理由があるに違いな

い」と確信した。

このような場合、日本では遠慮してなかなか聞けないのだが、海外にいる時は外国人であるのをいいことに単刀直入に尋ねることにしていた。「なぜ、放り投げたんですか？」その時、その出家修行者が話してくれたのが、先述したジャイナ教における地・水・火・風に関する考え方であった。

そして、電化製品が身近なものになった頃に、ジャイナ教テラー・パンタ派の教団内で「電気は火元素なのではないか？」という議論が起ったという話も教えてくれた。つまり、生き物を殺さないよう、むやみに土を掘ったり、水を撒いたりしてはいけないのと同様に、火元素と考えられる電気にも不用意に触れてはいけないというわけである。

さらには、アーチャーリヤ（教団のリーダー）の命令により、ある出家修行者が電気が火元素であるのかどうかを研究し、その成果を一冊の本にまとめたという。私はさっそくキヤンパス内の書店で、その名も“*ka va vidvat (iekhristi) saciha teukhya hai?*”（電気は生き物を含む火元素か？）というヒンディー語の本を購入した。

この本によれば、ヴィクラマ暦二〇二三年（西暦一九六七—六八年に相当）に第九代アーチャーリヤのトゥルシー師がラージャスターン州のビーダーサルに滞在していた時、多くの者たちに「電気は生き物を含むのか否か？」というテーマで三日間にわたる討論を行わせたという。この時、トゥルシ

ー師は最終的に「電気は生き物を含まない」という立場を承認したが、出家修行者の行いには適用されなかった。

その後、第十代アーチャーリヤのマハーブラツギヤ師は、ジャイナ教聖典と科学との両方に基づいてこの分野に関する本を書くよう出家修行者のマヘンドラクマールに命じた。マヘンドラクマールはボンベイ大学の物理学専攻を首席で卒業しているため、理科系の研究に適していると考えられたのであろう。彼は物理学や化学に関する書物、インターネットなどから得た情報をもとに研究を進めて雑誌論文を数本執筆し、それらを集めて出来上がったのがこの本である。

この本は二つの章から成る。第一章は十節から成り、ジャイナ教聖典やその他の文献、そして科学における電気や光、火に関する理論的考察に当てられている。第二章は、第一章で述べられたような専門的な内容がQ&A形式でわかりやすく解説されている。また補遺には、稲妻や灯火の光などが生き物を含むのかどうかという点に関する肯定的立場、否定的立場を古い文献から集めて収録しており興味深い。

そして最も重要な点であるが、この研究によって得られた結論は「電気は火元素ではない」というものであった。Q4の「スイッチのオン・オフの際に出る火花は火ではないのか？」という問いやQ5の「出家修行者は、マイクその他の電化製品を使用しても良いのか？」という問いに対しても、様々な証拠を挙げて電気の花火が火ではないことを論じ、そ

れを出家修行者が使用したとしても過失にはならないと述べている。

しかし最後に、行いという点から見れば、出家修行者は電化製品を使用せず、他者に使用させず、他者が使用するのを認めないのが適切であり、あくまでも在家信者のための使用であると述べられているが、理由は記されていない。「電気は生き物を含まない」という結論が出ているにもかかわらず、なぜいまだに電化製品に触れてはいけないのだろうか。

私が再び同じ出家修行者のところに行き、そのことを尋ねてみると、彼は次のように話してくれた。「あなたの言う通り、研究の結果、電気は生き物を含まないという結論が出た。しかし、私たちはいまでも電化製品には触れない。というのも、例えばテープレコーダーなどに繰り返し触れたりすることにより執着が生まれ、それらが欲しい、それらを集めたいといった欲望が生じる可能性があるからだ。」私はこの説明を聞いてもどうも釈然としなかった。

後日、別の出家修行者から、テーラーパンタ派では年に一回、出家修行者全員が一堂に会する大きな集会を開いて、律（教団内のルール）に関する議論を行うという話を聞いた。そのルールを記した紙も存在するらしい。ジャイナ教の古い律文献は非常に難解であり、研究もあまり進んでいない。ましてや、電気に関する記述は古い文献には見られない。古い文献の記述を基本としながらも、新しい問題にも対応している

現代の出家修行者のルールには大変興味がある。私は「ぜひ、その紙を見せて欲しい」と言った。

しかしながら、普段は私の図々しいお願いのほとんどを聞いてくれる出家修行者も「いやあ、ちょっと、どこにしまったのか忘れてしまったなあ……」といった感じでのらりくらりとかわし、見せてくれる気配がない。出家修行者以外には見せてはいけないものなのかもしれない。

そのため、「電気は生き物を含まない」という結論が出た後も出家修行者が電化製品に触れないでいる本当の理由ははっきりしない。先述の出家修行者の説明が教団の公式見解であるのかどうかも分からない。あるいは、一度はタブー視されたものに対する抵抗感は、そう簡単には解消されないということなのだろうか。

いずれにしても、この問題は、長い歴史を持つ伝統的な宗教と現代文明とが接触した際に起こった反応の一例として非常に興味深いものである。そして、古い聖典などにないものと出会った際に、出家修行者に命じ、科学に関する知識も身につけさせたいうえで結論を出そうとした姿勢は、仏教などの宗教よりも不殺生を徹底してきたジャイナ教ならではの大きな特徴と呼べるのではないだろうか。

春 秋

Shunjū
2015
4

巻頭エッセー

「良く整えられた音楽」への道を問う

—バッハが手にした『カーロフ聖書』① 丸山桂介 1

モーツァルトの死をめぐる考察② 塩山千仞 5

永明延寿と『宗鏡録』(上)

—唐宋変革期における中国仏教の再編 柳 幹康 9

電気は生き物か?

—ジャイナ教出家修行者と電化製品 堀田和義 12

〃人物育成〃の教育改革に向けて

「旧制高等学校五彩」その四「白」 岸保芳郎 16

道草 アングリマーラ連作短編⑩ 完 田口ランディ 20

いくつかの答え オペラはやっぱり手ごわい⑩ 完 岸 純信 24

藤川・寺 わたしの五十三次 考現学的考察⑫ 池内 紀 28

インド映画に降る雨は—⑬ 濡れたサリーが……—「きっと、うまくいく」🌀 高橋 明



●題字：顔真卿
●D：吉澤泰雄
平成二十二年三月五日発行

春秋

発行人：澤畑吉和 発行所：株式会社 春秋社 〒101-0021 東京都千代田区外神田2-1-6
電話：03-3255-5961 営業：3255-9614 編集：3255-9614 FAX：3253-1384 編集：3255-9370 編集
振替：001800624661 印刷：萩原印刷株式会社 定価：2,040円（本体1,800円）税別送料別

シリーズ 日蓮

〈全5巻〉

小松邦彰・西山茂
上杉清文・末木文美士・花野充道

〔編集〕



③ 日蓮教団の成立と展開

●小松十花野 責任編集 日蓮教団が成立して以後、六老僧を中心とした門流がどのように形成され、展開していったのか、最新の歴史学の成果を取り入れて諸問題を多角的に論じていく。
第四回配本 17353-4 4000円

巻内容
全内

①法華経と日蓮 ②日蓮の思想とその展開 ③日蓮教団の成立と展開 ④近現代の法華運動と在家教団 ⑤現代世界と日蓮 *白抜き既刊 ①3500円 ②4800円 ④4000円

シリーズ 日本人と宗教

近世から近代へ〈全6巻〉

島蘭進・高埜利彦・林淳・若尾政希 編

④ 勸進・参詣・祝祭

第四回配本 29947-9 3200円

近世に盛んとなった霊場巡礼・寺院参拝に焦点を当てて、開帳やおかけ参り、金毘羅参りなどの事例から、民衆意識とそれに対する宗教者の動向を論じる。

- ① 将軍と天皇 ② 神・儒・仏の時代 ③ 生と死 ④ 勸進・参詣・祝祭
⑤ 書物・メディアと社会 ⑥ 他者と境界 ※白抜き既刊 各巻3200円

全巻内容

道元禅師の思想的研究

●角田泰隆 道元が弟子や後世の人びとに伝えたかったことは何だったのか。修証観・時間論などさまざまな角度から総合的に検討し、道元の思想の核心に迫る画期的な論考。

11317-2 25000円

角田泰隆
道元禅師の思想的研究

033255-9370